(断章:抜き書き)宗教的象徴-「名号」について

◆はじめに

石田慶和先生著『これからの浄土真宗』には、宗教的象徴としての「名号」の構造を実に分かり易く表現して戴いています。同書は、本願寺出版社から出版された(唯今絶版)御書物ですが、該当箇所を抜き書きさせて戴きました。

◆宗教的象徴とは何かー「名号」について(一)

親鸞聖人は『教行信証』の「教巻」の初めに、「眞実の教」は『大無量寿経』であるとされ、その経の宗致は「本願」であり、体は「名号」であるとおっしゃっています。「本願と名号」が浄土の教えの根本であることを明言されているのです。

鈴木大拙先生は「名号は実に浄土教体系の一大礎石である。それ故、名号の何であるかを会得することは、浄土教を会得することでもあると云ってよい。本願の主人公で、浄土全系を支えている阿弥陀仏そのものも、その名号に尽きると認められ能ふのである。阿弥陀仏はその名号と同一体である。

此土の吾等、相関的・対峙的・現象的方便界の吾等は、阿弥陀仏の浄土と直接の交渉を開く訳にはいかぬので、必ずその名号を媒介とする。名号は、一面娑婆に繋がり、他面浄土と繋がる。名号の眞実に掴まれるとき、それは直ちに浄土往生の事実体験となるのである。即ち阿弥陀仏と覿面(てきめん)に相対することになるのである。」(鈴木大拙全集第六巻所収「我観浄土と名号」)とおっしゃっています。

また「弥陀と名号とは離れぬものである。弥陀即名号である。弥陀の本願も名号がなくては何らの働きをせぬ。何れもが名号を通して現実化する。が、この名号は聞かれなくてはならぬ。・・・弥陀の名号だけあっても役に立たぬ。これが聞かれて称えられる時に、名号は本当に名号となるのである。」(全集第六巻所収「浄土観・名号・禅」)ともおっしゃっています。

まさに名号についての教えが、浄土真宗の教えの中核を形成していると言ってよいでしょう。宗学では、「名体不二」とか「全徳施名」という表現によって、如来が衆生に代って成就された全徳を名号に施されるということとして説明されますが、そういう説明では既に経典に述べられている事柄を敷衍(ふえん)しているだけで、なぜ名号でなければならないか、我々の宗教的体験としてそのことがどういう意味を持つかについては、十分明らかにされていないように思われます。

名号というのは、名前です。この場合には、阿弥陀仏という仏さまの名前であることはいうまでもありません。その意味では、普通の事物に付けられた名前と変わるところはありません。しかし、普通の事物に付いた名前であっても、いろいろな違いがあります。例えば、「家」を表す「ハウス」という言葉と「ホーム」とう言葉では意味するところが非常に違います。「ハウス」は、家そのものを表しますが、「ホーム」という言葉には、家庭とか家族とかいう意味が含まれて居ます。だから「アットホーム」とか「ホームレス」という言葉が特別な意味をもつようになるのです。更に芸術的な表現の中で用いられる言葉になると、日常的な事物を指す言葉とは全く異なった意味を持つこともあるのです。その意味で、名前と云ってもいろいろの段階があると言えましょう。

浄土真宗の名号は、どういう意味をもった名前なのでしょうか。

宗教的表現は、象徴的表現であると言われます。象徴的表現というのは、事物そのものを表すのではなく、事物を超えた次元を表すということです。特に普通の存在を超え、日常的には隠された次元を表すという働きを持つのが宗教的表現の象徴性の特色です。

象徴というものは、いろんな場合に考えられます。
例えば、赤い薔薇が情熱の象徴であるというとき、薔薇と情熱を結びつける必然性はありませんが、赤い薔薇が人間の激しい情熱を表すと認められると、薔薇は情熱の象徴となるのです。

「百万本の薔薇」という歌がありますが、その歌詞はこういうことを歌っています。ある女優さんに恋をした貧乏な青年が、その女性の窓の下をありたけの金で買った百万本の赤い薔薇の花で埋めます。しかし女優は誰か気紛れな者の仕業だと思って青年の心に気付きません。青年は絶望して死んでしまうというような歌詞だったと思います。この場合、青年にとっては、赤い薔薇は自分の情熱の表現です。しかし、女優にとっては薔薇は単なる花に過ぎません。ある事物について象徴というのはこういう場合を言うのです。青年の情熱は目には見えません。しかし、青年にとっては、薔薇はリアルな事実です。それを表現するのが赤い薔薇です。薔薇は見えない青年の情熱を表現しているのです。しかし、それが認められないとき、薔薇は象徴の働きをしません。単なる花に過ぎません。したがって、薔薇が象徴であるためには、それを認めるということがなければなりません。それが認められると、薔薇は情熱という見えないものを表現することができます。カルメンがくわえる赤い薔薇がカルメンの情熱を象徴していることは誰もが認めているのです。

宗教的象徴もそれと同じところがあります。

名号は仏さまの衆生を救う働きの象徴です。この場合、象徴と働きとが別にあるのではなく、名号そのものが働きなのです。名号が日常的には隠された仏さまの衆生を救おうという働きに他ならないのです。そのことを最も明確にされたのが、親鸞聖人の**「六字釈」**、即ち**「帰命は本願招喚の勅命なり」**という御言葉ではないでしょうか。

しかし、名号のその働きは、私たちによって受けとめられなければなりません。先の例で言ったように、名号を聞く者に認められなければなりません。そうでなければ宗教的象徴としての働きをもちません。それは単なる呪文であったり、記号に過ぎないものとなってしまうのです。(聞こえて下さった)名号を「本願招喚の勅命」と受けとめることこそ、「信心」なのです。その信心が開かれてはじめて名号は宗教的象徴となります。

名号は私達にいのちを与える言葉としての象徴です。言葉というものは、私達の命を奪うこともできるし与えることもできます。

以前にドイツに居たとき、独語が十分に解らないのでテレビの音を消してドラマを見ていたことがあります。すると主人公の言葉によって他の人が喜んだり悲しんだりするのです。私はその時、言葉というものは人を喜ばせたり悲しませたりするものだということに気がつきました。私達は日常そういうことに気がつきません。人を傷付けるようなことを平気で言っています。しかし言葉には人の生き方を左右する力があるのです。日常的な言葉にもそういう力がありますが、名号はそういう日常的な言葉ではありません。本当に人に命を与える言葉です。しかしそういう特別な象徴性をもった言葉であることに気がつかない限り、その働きに触れることはできません。

キリスト教では、十字架が中核的な象徴です。それは名号のように言葉による象徴ではなく、形態による象徴ですが、キリスト教にとっては決定的な意味をもつものです。十字架は、イエスの受難と死を意味し、またイエスによる人間の救済を意味するものです。キリスト教徒にとって、それがどれ程重要なものであるかは、例えば、映画等でよく見る十字架を悪魔にかざすことによって悪魔が退散するという場面からも知ることができます。

しかし、私達仏教徒にはその十字架の働きは十分理解できないものです。それは私達が十字架を宗教的象徴として受け取っていないからです。言い換えれば、キリスト教の信仰をもたないからです。そういうことからも宗教的象徴と信仰ということが密接に結びついていることが理解されると思います。

名号は、キリスト教の十字架に対応する浄土教の中心的な象徴であると考えられます。私達は名号によって、深い宗教的次元に達することができるのです。宗教的象徴は、単に

日常的には隠された次元を顕わにするだけではなく、私達を本当の生命へと導く働きをするのです。

◆聞其名号　信心歓喜ー「名号」について(二)

親鸞聖人は,『教行信証』の「信巻」に、『大経』下巻成就文の「聞其名号」を説明して、**「聞といふは、衆生、仏願の生起本末を聞きて疑心あることなし、これを聞といふなり。」**とおっしゃっています。「仏願の生起本末」というのは、阿弥陀仏が本願を起こされた由来と、本願成就されて現に衆生を救済されていることをいうと理解されています。

そこで、「名号を聞く」というのは、仏願の生起本末という「名号の謂われ」を聞くことだと説明されるのです。しかし、「名号を聞く」ということは、名号の意味を聞いて理解し納得するということではないように思います。それは、南無阿弥陀佛の名号を、私を喚び続けていて下さるお喚び声として本当に受けとめるということではないでしょうか。そこに名号による救済ということが実現するのです。それを親鸞聖人は「仏願の生起本末を聞きて疑心あることなし」とおっしゃっているのだと思います。

聖人は、六角堂を出て、法然聖人の許にお越しになった時、法然聖人の**「念仏して弥陀にたすけられまゐらすべし」**と言う御言葉をお聞きになると共にご門弟達と一緒に南無阿弥陀佛と称えていらっしゃる法然聖人のお声をお聞きになったのではないでしょうか。

そのお声を「本願招喚の勅命」とお聞きになり、同時にそれをそのまま「諸仏の称揚」とお聞きになったところに、親鸞聖人の宗教的経験があったのではないでしょうか。

その宗教的経験を反省的に理解されたとき、そこに「仏願の生起本末を聞きて疑心あることなし」という事態が明らかになったと考えられます。

「名号を聞く」ということが「名号の謂われ」を聞いて理解し納得することだったら、そこに「信心」が開発するということは起こりません。

(考察) ご常教では、聞名を広讃 (名号の謂われ) を聞くことであって、略讃 (称歎) を聞くことでは無いとしています。厳しいことのようですが御常教では信心が開発することはないことを意味します。

「信心」が開発するということがなければ、名号が宗教的象徴として成立するということも起こりません。「名号」の働きが私達の心に届いたのが「信心」であり、口に現れるのが「称名」であると説明されますが、そのことを理解し納得したところで、仏さまの救いが実現するわけではありません。

親鸞聖人が法然聖人の称えていらっしゃる「南無阿弥陀佛」というお名号をお聞きになったとき、その場で救いが実現したのであり、そこに「至心信楽、己を忘れて弥陀をたのむ」

という境地が現前したのです。それが親鸞聖人の宗教的経験にほかなりません。

ここで、名号を宗教的象徴と考えるということも、「名号を聞く」ということの意味を考えているだけのことで、そのことを理解しても、名号の働きを受けとめたことにはなりません。「名号の謂われ」を知っても、名号を本当に受けとめたことにならないのと同じです。それはまた、本願が仏さまの慈悲の働きという意味をもっていると理解しても、本願を信じたことにはならないのと同じことです。ここでは浄土教の宗教的経験がどういう意味をもつかを明らかにすることによって、浄土教の普遍性を明らかにしようとしているのであって、それを前提とした上で、「名号」の意味を考えているのです。

宗教的象徴は、日常的には隠された次元を明らかにすると申しましたが、それはどういうことなのでしょうか。仏さまの救済と言うことは、日常的には隠されています。それは「煩悩障眼雖不見、大悲無倦常照我 (煩悩、眼を障えて見たてまつらずといえども、大悲、倦きことなくして常にわれを照らしたまふ (『お正信偈』) と言われる通りです。そういう救済の働きを顕わにするのが宗教的象徴です。そういうものとして宗教的象徴を受けとめなければ、象徴は単なる言葉でしかありません。

宗教的象徴の働きを見事に表現したものとして次の様な例を挙げることができましょう。これは人間の罪業を取りあげたものですが、罪業の意識というものも日常には隠されたものです。それがあるとき、ある象徴によって人間の意識に浮かび上ってくるのです。

ドストエフスキーの作品に『悪霊』という小説があります。

主人公は、スタヴローギンという人物で、人間として生きることの基本的なモラルというものを一切信じない徹底したニヒリストとして描かれています。その男が過去に犯した罪を思い出すという場面があります。それは、彼が幸せな気分で過ごしているときに突然起こります。目の前に赤い小さい蜘蛛が現れるのです。その蜘蛛によって彼は曾て自分の犯した忌まわしい事件をはっきりと思い出します。ある少女を陵辱し、その少女が絶望の余り縊死 (いし=首を吊ること) する様子を隠れて見ていたのです。そのとき、スタヴローギンは、赤い蜘蛛が目の前にいるのを見ています。そのことを、彼は長い間、忘れていたのです。しかし、突然、その記憶が蘇ってきます。そして痛切な思いで、縊死した少女のそのときの表情を思い出します。この場合、彼の目の前に現れた赤い小さい蜘蛛が決定的な働きをするのです。その赤い蜘蛛はスタヴローギンの意識の奥深くに眠っていた罪の意識の象徴です。眼には見えないが、彼にとっては強烈なリアリティをもった罪の意識の象徴です。目には見えなくとも、彼にとっては強烈なリアリティをもった罪の意識というものを鮮明

に表現しているのです。これは一人の人間の罪という問題に関わることですが、宗教的象徴というものの働きをよく表しているように思われます。

宗教的象徴としての「名号」の働きを考えるために、ドストエフスキーの小説の例を挙げましたが、その内容は、スタヴローギンという個人の罪の意識を問題にしているので、「名号」の場合とは違います。しかし、この例によって象徴というものの働きを理解することができましょう。

「名号」の場合は、個々の人間の過去の行為を意識的に導き出すのではありません。むしろ個々の人間を超えた人間全体の根源的な事柄を導き出すところに、「名号」の働きの意味があると考えられます。すなわち、すべての衆生の迷いからの解脱、或いは生死出離という事柄の実現を導き出すのが宗教的象徴としての「名号」の働きです。

一切の有情の根源的な救済の実現ということは、人間の普通の理解を超えるところがあるので、例えば「昔、世尊を見たてまつりし者は、すなはちよくこの事を信じ、健敬にして聞きて奉行し踊躍して大いに歓喜す」(『大経』「東方偈」) とか、「宿世に諸仏を見たてまつりしものは、楽んでかくの如きの教えを聞かん (同) と言われるのではないでしょうか。

「名号」は一方では人間の罪業を顕わにし、一方では如来の救済を顕わにする働きを持つものです。そういう二重の働きをもつところに「名号」の決定的な意味があります。「名号」のその働きが実現されることが「信心」といわれる事態であると言ってよいでしょう。

「名号」によってそういう根源的な救済ということが実現されるということは、「信心」を獲得した人がいるという事実によって証されます。

「信心」獲得とか、「信楽」開発という事実が、「名号」の働きを証すものに他なりません。古来、「名号のひとりばたらき」というのはそういうことを言うのではないでしょうか。

親鸞聖人はそういう「名号」の救済を体認されたのです。そこから聖人のすべての教えは出てきます。浄土教の歴史はそういう「名号」による救済が実現してゆく歴史と考えられます。そしてその「名号」の本来の意味を最も明確にされたのが親鸞聖人だったということができると思います。(以上、石田慶和著『これからの浄土真宗』p69～83)

(お断り)本質を替える虞れの無い限り、具体的表現に多少の筆を加えています。合掌。

◆仏教壮年会お聴聞の会　二月三日(日)二十時、
◆仏教婦人会例会　二月十六日(土)十九時半、
◆永代経　三月二日 (土) 十三時半　お客僧　本願寺派布教使　田淵幸響師

著作編集兼発行元(本願寺派　正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地
TEL077-596-0166、FAX077-596-0196 住職　堅田　玄宥